

# 子の日の小松引き

## 1. 小松引きとは？

冬には、すべての動植物が活動を停止し、死に絶えてしまったような寂しさを感じます。そのような中でも、松は葉を落とさずに、色あせない緑を保つことができる生命力の強い木です。このため、古来より、松は神聖な木とされ、「不老長寿」のシンボルとされ、大切にされてきました。そこで千年の齢をもつ松の若木を根から引き抜いて、その長寿を譲り受けようと願ったイベントが「小松引き」です。

平安時代の貴族達の間では、正月の最初の子の日（初子の日）に、北野や紫野など京都郊外の野辺に出かけ、若菜を摘み、小松を引いて、楽しい一日を過ごす風習がありました。この日、山に登り遠く四方を望めば、邪気を祓い憂悩を除くとする中国の習俗に拠るとされています。いつから始まったか正確にはわかりませんが、宮中においては、他の節会などと同様、奈良時代から催されていたことが知られています。

正月の年中行事は一般的に内裏の中で行われましたが、初子の日に催される子の日の遊びは北野や紫野のような郊外に出て、特に小松の根を引き、若菜を摘み、健康と長寿を祈願した後、そのまま宴を開き、楽しみ遊ぶ儀式でした。

この日に着用する狩衣を「子の日衣」、引いてとる松を「子の日の松」、また若菜を「子の日草」といいました。この小松を根引きする行事が、現在の「門松」の起源になったともいわれており、また、正月七日の「七種粥」は「若菜摘み」を受け継いだものとされています。

## 2. 文学における「子の日の小松引き」

子の日の小松引きを詠む込んだ和歌や俳句は多く、栄花物語などの文学作品にも登場し、また、日本画の題材にもなっています。そのすべてとはいきませんが、いま把握できているものを、以下にご紹介します。

### (1) 和歌

※新古今和歌集に「子の日」、「小松引き」を詠んだ歌がありました。

『子の日してしめつる野辺の姫小松 引かでや千代の陰を待たまし』（巻7 藤原清正）  
（子の日の祝いをして、場所を占めておいた野辺の姫小松よ、引かないで千年の後の茂る木陰を待っていようか。）

⇒「しめつる」は標しを張って場所を占めておいたの意。小松を引いて千代を願い祝う子の日、小松の愛らしさに、小松の千代の栄えを待とうか、という心になった、という発想に新味があり、情味もある歌

『子の日する御垣の内の小松原 千代をば外のものとは見る』(巻第7賀歌 大納言経信)

(子の日をする宮中の小松原よ、その小松にあやかる千年の栄えを、宮中の外のものともみようか、みはしない)

『子の日する野辺の小松を移し植えて 年の緒長く君ぞ引くべき』(巻7賀歌 権中納言通俊)

(子の日する野辺の小松を、宮中のお庭に移し植えて、年久しく、わが君はお引きになることであろう)

※上記の説明にピッタリの歌が、**拾遺和歌集**にもありました。

『子の日する野辺に小松のなかりせば 千代のためしに何を引かまし』(春 忠岑)

(子の日の遊びをする野辺に、根引きする小松がもしなかったならば、千代の長寿にあやから例として、いったい何を引いたらよいのだろう)

『千年まで限れる松も今日よりは 君に引かれて万代や経む』(春 大中臣能宣)

(千年までと寿命を限られている松も、今日からは、貴君の寿命にあやかって万代までも生き長らえることになるだろう)

『ひきて見る 子の日の松は程なきを いかで籠れる 千代にかあるらむ』(巻16雑春 惠恵法師)

(根を引いてみると、子の日の松はあまり長くもないのに、どうしてこの松の中に千年もの寿命がこもっているのであろう。)

⇒平安中期の優れた歌人である惠慶法師が詠んだもので、拾遺和歌集には『八重むぐらしげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり』(このような、幾重にも雑草の生い茂った宿は荒れて寂しく、人は誰も訪ねてはこないが、ここにも秋だけは訪れるようだ。)も収められており、これは百人一首にも選ばれています。

除目のころ子の日にあたりて侍りけるに、按察更衣のつほねより松をはしにてたへものをいたして侍りけるに

『引く人も なくてやみぬるみよしのの 松は子の日を よそにこそきけ』(巻16雑春)

※後拾遺和歌集にもありました。

小野宮の太政大臣の家に子の日し侍りけるに

『千年へむ宿の子の日の松をこそ ほかのためしに引かんとすらめ』(巻1 春上 清原元輔)

(千年も栄え続くであろうこの家の子の日の松だから、それにあやかろうと他の家でも栄える例として引こうとすることだ)

『ひきつれて今日は子の日の松にまた いま千年をそ野辺にいでつる』(春上 和泉式部)

(子の日の松を引くことによって、さらに千年の寿命を延ばそうと、今日は人々と連れだって野辺に出て来たことです)

※玉葉集にもありました。

『子日する 野辺に小松を 引き連れて、帰る山路に、鶯ぞ鳴く』(春歌上 大中臣能宣)

(子の日の遊びをする 野辺にきて小さな松を引きぬいた そして友らを引き連れて僕は帰る 楽しい一日が終わりに近づく帰りの山道 その時にふと鶯が鳴いた)

『今日よりは 君に引かるる姫小松 いく万代か 春にあふべき』(春歌上 九条兼実)

(今日からは 貴女はあの方の所に引かれてやってきた小さな松であれ 我が姫よ これから何万年の春に出逢うことだろうか)

## (2) 俳句

『子の日しに 都へ行かん 友もがな』(松尾芭蕉・貞享2年)

(子の日の遊びをしに都まで一緒に旅をする人がいるとよいのだが)

## (3) 物語

正月の年中行事は一般的に内裏の中で行われましたが、初子の日に催される子の日の遊びは北野や紫野のような郊外に出て、特に小松の根を引き、若菜を摘み、健康と長寿を祈願した後、そのまま宴を開き、楽しみ遊ぶ儀式でした。

宮中のみで行われる他の公的な行事と違い、野外で催されるという特徴のため、儀礼を詳細に記録する儀式書のみではなく、虚構の文学作品のなかでも重要な素材として用いられるようになりました。

「源氏物語」「枕草子」「栄花物語」「古今集」など、平安時代を代表する多くの作品の中で子の日は小松・若菜とともに使われ、春の到来を喜び、そのうれしさを賞する内容として織り成されています。こうした作品を通して子の日の遊びは春の訪れを満喫する、喜ばしい

晴れの行事という肯定的なイメージが構築されるようになり、作品をより豊かに作り上げることができたと言えましょう。平安時代だけでなく、以後の作品にもそうした基底が受け継がれています。

### ※土佐日記（紀貫之）

『 1月29日

廿九日、船出して行く。うらうらと照りて漕ぎ行く。爪のいと長くなりたるを見て、日をかぞふれば、今日は子の日なりければ切らず。正月（むつき）なれば京の子の日のこといひ出で、

「おぼつかな今日は子の日か海女ならば 海松をだに引かましものを」

とぞいへる。海にて「子の日」の歌にては、いかゞあらむ。

又ある人のよめるうた、

「けふなれど若菜もつまず春日野のわが漕ぎわたる浦になれば」

かくいひつゝ漕ぎ行く。

（以下略） 』

⇒（訳）1月29日、船を出して行く。うららかに日が照って、その中を漕いで行く。見れば爪がすっかり長くのびている。日を数えてみたら今日は子の日であるので、明日の丑の日に切ることにした。（筆者註：手の爪は丑の日に切るきまりがあった。子の日はその前日にあたるので、爪を切らなかった、ということ）。

また、京都での子の日の行事が思い出され、「小松があればなあ」とふっと言葉が漏れたが、今は海上の船の上なので無理だよな。船上の一人の女性が、「頼りないなあ、今日は本当に子の日なのかなあ。自分がもし海女ならば、小松のかわりにせめて海松（筆者註：「みる」という名の海藻）を引いてみようものを」と詠んで聞かせた。だが、そもそも海上にいて「子の日」という題の歌ではどうであろうか。

また、ある人が、「正月の子の日は今日なのに若菜も摘まない。春日野は今自分が漕いで進んでいく浦にはないゆえに」と詠んだ。

このように言い言いしながら、漕いで行く。

（小学館「日本古典文学全集13」p40～41）

### ※源氏物語

「初音の巻」

『今日は子の日なりけり。げに、千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。姫君の御方に渡りたまへれば、童女、下仕など、御前の山の小松引き遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。』

⇒(訳)今日は子の日です。実に千年の春を末長い長寿を願って祝うには、まさに相応しい日なのだ。明石の姫君の所へお越しになると、童女や下働きの子などが、前庭の小松を引いて遊んでいた。若い女房たちの気持ちは、自分たちも引いてみたくて、じっとしてられない様子である。)

(小学館「日本古典文学全集」p145～68)

⇒背景がさっぱり分りませんので、ちょっとくどくなりますがご説明します。

光源氏の父・桐壺帝の時に権勢を誇っていた「右大臣」の六の君(6番目の娘)を「朧月夜」といいます。桐壺帝の女御となっている弘徽殿女御の妹でもあり、「源氏物語」の作中では珍しい艶やかで奔放な気性の女君です。

朧月夜は、弘徽殿女御の産んだ東宮(光源氏の兄で、桐壺帝が譲位した後に「朱雀帝」となる)に入内する予定でしたが、宮中の桜花の宴の夜に思いがけなくも光源氏と出会い、関係を結びました。朧月夜は、朱雀帝の寵愛を一身に受ける一方、源氏との逢瀬も密かに続けていました。

が、光源氏と朧月夜との仲が発覚し、右大臣と弘徽殿大后の怒りを買うに至り、追いつめられた光源氏は自ら須磨への退去しました。須磨の侘び住まいで、源氏は都の人々と便りを交わしたり絵を描いたりしつつ、淋しい日々を送ることになります。

そんな或る豪雨の夜、落雷で邸が火事に見舞われてしまいます。翌朝、明石入道(源氏の母方の祖父の甥で三位の中将という高官でしたが、京官に見切りをつけて播磨守となり、そのまま出家して明石の浦に住んでいました。)が迎えの舟に乗って現れ、源氏一行は明石へと移りました。

入道は源氏を邸に迎えて手厚くもてなし、かねて都の貴人と娶わせようと考えていた一人娘(明石の御方)を、この機会に源氏に差し出そうとします。当の娘は身分違いすぎると気が進まなかったのですが、源氏は娘と文のやり取りを交わすうちにその教養の深さや人柄に惹かれ、ついに8月自ら娘のもとを訪れて契りを交わしました。

やがて朱雀帝の許しが出て、光源氏は都へ戻ることになりましたが、その頃既に明石の御方は光源氏の子を身ごもっており、別れを嘆く明石の御方に光源氏はいつか必ず都へ迎えることを約束して、ともかくも都に返りました。

朱雀帝が位を退き冷泉帝へ譲位し、その機に、都に返り咲いていた光源氏は内大臣に昇進しました。一方、明石の御方は無事姫君を出産しました。

⇒文中の「姫君」は「明石の姫君」といわれる女君で、光源氏と「明石の御方」との間に生まれた一人娘です。出自の低い母・明石の御方から生まれたため、光源氏は娘を手元に引き取り、正妻格である「紫の上」の養女として、高い后教育を施すことにしたのです。明石の

姫君は紫の上とは実の母子でないことを知っていますが、愛情深い養母に育てられて、美しく育っています。

上の文章は、初子の日に、光源氏が明石の姫君のもとを訪れた際の情景を描いたものです。

### ※栄花物語

「巻第一 月の宴」

『式部卿宮の童におはしまししをりの御子の日の日、帝、后もろともにみたせたまひて、出し立てたてまつらせたまひしほど、御馬召し出でて、御前にて御装ひ置かせなどして、鷹犬飼までの有様をご覧いれて、弘徽殿のはざまより出でさせたまひし。

御共に左近中将重光朝臣、蔵人頭右近中将延光朝臣、式部大輔保光朝臣、中宮権大夫兼通朝臣、兵部大輔兼家朝臣など、いと多くおはしきや。

その君達、あるは後の御兄たち、同じき君達と聞ゆれど、延喜の御子中務宮の御子ぞかし。今はみな大人になりておはする殿ばらぞかし。をかしき御狩装束どもにて、さもをかしかりしかな。

船岡にて乱れたはぶれたまひしこそ、いみじき見物なりしか。后宮の女房、車三つ四つに乗りこぼれて、大海の摺裳うち出したるに、船岡の松の緑も色濃く、行く末はるかにめでたかりしことぞとや」と語りつづくるを聞くも、今はをかしうぞ。

「四の宮帝がねと申し思ひしかど、いづらは源氏の大臣の御婿になりたまひしに、事違ふと見えしものをや」など、世にある人、あいなきことをぞ、苦しげに言ひ思ふものなめる。』

⇒ (訳) 式部卿の宮がまだ幼少でいらっしやった頃の御子の日に、父帝と母后とがご一緒になって熱心にお世話なさって、宮をお出し申された時、御馬までも召し出されて御前で鞍を置かせなどなさり、鷹飼や犬飼までもよくご検分あそばして、宮(式部卿宮、後の為平親王)は弘徽殿の通路から、ご出立いなられた。

そのお供には…(略)…実に大勢いらっしやったことよ。それらお供の君達は、あるいは中宮の御兄たちであったり、延喜の帝(醍醐天皇)の皇子の中務宮の御子である。今はどなたも一人前になっておられる殿方ではあった。ご立派な御狩装束を着用しておられて、いかにもおみごとなものであった。船岡山で入り乱れて遊ばれた光景は、たいそうな見ものであった。

中宮付きの女房たちが三、四輛の車にこぼれるばかりに乗って、大海の模様を摺りだした裳の袖や裾を簾の下から見せていたが、船岡の松の緑も色濃く、宮の行く末も洋々として、おみごとなものであった。」と、人の語り続けるのを耳にするにつけても、今はそうした昔のことの素晴らしさのみが回想される。

「四の宮は帝となるお方と思い申したが、いったい昔の御勢はどうなったのか。源氏の左大臣の御婿になられたので、それが踏み外しのようなだった」などと世間ではあらずもがなの

ことを言いにくそうに取沙汰するようである。)

(小学館「日本古典文学全集 3 1 栄花物語」 p 67～68)

⇒まず為平親王の両親である村上天皇と中宮・安子がいかに心を入れてこの子の日の遊びの準備を行ったかが語られ、その後、参加者の名前が連ねられています。そして内裏より北野に出て開かれた盛大な宴の様子が記されています。

⇒栄花物語は作者不詳の歴史物語で、宇多天皇(59代)の治世から堀河天皇(73代)までの約200年間の時代を扱っています。巻第一の「月の宴」の巻は、宇多天皇から、醍醐、朱雀、村上、冷泉、円融天皇までの6代、85年にわたっています。

醍醐天皇(第60代天皇)の後、朱雀天皇(第61代)が就位し、次いでその弟が村上天皇(第62代)となりました。村上帝には広平親王(母は藤原元方の女)、憲平親王、為平親王、守平親王(いずれも母は藤原師輔の女・安子)などの皇子がいました。

村上帝が崩御すると、憲平親王が即位して冷泉天皇となりましたが、狂気のふるまいが見られたことから、為平親王がその皇太弟になると予想されました。が、実際には為平親王の同母弟の守平親王(後の円融天皇)が皇太弟となりました。

上の文章の冒頭にあるように、村上帝の寵愛を一身に受けていた聡明な為平親王でした。なぜその為平親王は皇太弟になれなかったのか？

その背景には源高明(醍醐天皇の第11皇子)と藤原一族との権力争いがあったされています。すなわち為平親王の妃は、左大臣・源高明の娘でしたので、為平親王が次の天皇になると、源高明がさらなる権力を得ることになるので、これを藤原氏側の恐れたための画策といわれています。

上の文章の最後の世間の取沙汰は、このことを指しています。

## ※大鏡

[217] 円融院の子の日の御遊びと曾祢好忠

『この侍問ふ。

「円融院の紫野の子の日の日、曾祢好忠いかにはべりけることぞ」

と言え、

「それぞれ、いと興にはべりしことなり。さばかりのことに、上下をえらばず和歌を賞せさせたまはむに、げに入らまほしきことにはべれど、かくろへにて、優なる歌をよみ出ださむに、いと無礼にはべるべきことに、座に、ただつきにつきたりし、あさましくはべりしことぞかし。小野宮殿・閑院大将殿などぞかし、「引き立てよ、引き立てよ」と、おきてさせたまひしは。躬恒が別禄たまはるに、たとしへなき歌よみなりかし。歌いみじくとも、折節・

切り目を見て、つかうまつるべきなり。けしうはあらぬ歌よみなれど、辛う劣りにしことぞかし」

と言ふ。』

⇒（訳）例の侍が質問して、

「あの円融院が紫野に子の日の御遊びをなさったその日、曾禰好忠の一件とはどんなふうだったのですか」

と言いますと、

「そのことそのこと、あれは実におもしろいことでした。あれほどの晴れの御催しに、身分の上下を問わずに、和歌を賞美なさろうという時ですから、なるほど、その席に加わりたいことではございますが、その選に漏れたからには、仮に物陰にいて、優れた和歌を詠み出したとしても、まったく無礼なことではございましょう。それを好忠は、なんとお召しの歌人の座に強引に着座してしまったのですから、まったくあきれはてたことではございましたよ。

その時、小野宮殿、閑院の大將などでしたよ。「引き立てい、引き立てい」とご命令なされたのは。ですから躬恒が特別のご褒美をいただいたのに対して、この好忠は、比べようもない歌詠みですよ。歌がどんなに素晴らしくとも、その時と場合を考えて詠むべきです。好忠は、悪くもない歌詠みですけども、こういうところはひどく見劣りがしたことでしたなあ」

と言います。）

（小学館「日本古典文学全集34大鏡」p416）

⇒曾禰好忠のこの1件については、「今昔物語集」巻28第3話や、「古事談」第一にも見えます。

### ※今昔物語集

#### 「巻28第3話」

『今昔、円融院ノ天皇、位去セ給テ後、御子ノ日ノ逍遙ノ為ニ、船丘ト云フ所ニ出サセ給ケルニ、堀川ノ院ヨリ出サセ給テ、二条ヨリ西ヘ大宮マデ、大宮ヨリ上ニ御マシケルニ、物見車所無ク立重タリ。上達部殿上人ノ仕レル装束、書ムニモ可書尽クモ非ズ。

院ハ雲林院ノ南ノ大門ノ前ニシテ御馬ニ奉テ、紫野ニ御マシ着タレバ、船丘ノ北面ニ小松所々ニ群生タル中ニ、遣水ヲ遣リ、石ヲ立、砂ヲ敷テ、唐錦ノ平張ヲ立テ、簾ヲ懸、板敷ヲ敷キ、高欄ヲゾシテ、其ノ微妙キ事無限シ。其レニ御マシテ其ノ廻ニ、同錦ノ幕ヲ引廻カシタリ。御前近ク上達部ノ座有リ。其ノ次ニ殿上人ノ座有リ。殿上人ノ座ノ末ノ方ニ、幕ニ副テ横様ニ、和歌読ミノ座ヲ敷タリ。

既ニ御マシ着ヌレバ、上達部殿上人仰ニ依テ座ニ着ス。和歌読共ハ兼テ召有ケレバ、皆參テ候フ。「座ニ候ヘ」ト仰セ被下ヌレバ、仰ニ依テ次第ニ寄テ座ニ着ス。其ノ歌詠共ハ大中

臣ノ能宣、源ノ兼盛、清原ノ元輔、源ノ茲之、紀ノ時文等也。此ノ五人ハ兼テ院ヨリ廻シ文ヲ以テ可参キ由被催タリケレバ、皆衣冠シテ参タル也。

既ニ座ニ着並ヌルニ、暫許有テ、此ノ歌読ノ座ノ末ニ、烏帽子キタル翁ノ丁染ノ狩衣袴ノ賤気ナルヲ着タル、来テ座ニ着ヌ。人々有テ、「此ハ何者ゾ」ト思テ目ヲ付テ見レバ、曾禰ノ好忠也ケリ。殿上人共、「彼レハ曾丹ガ参タルカ」ト忍テ問ヘバ、曾丹此ク被問テ気色立テ、「然ニ候フ」ト答フ。其ノ時ニ、行事ノ判官代ニ、「彼曾丹ガ参タルニ、召タルカ」ト殿上人共問ケレバ、判官代、「然ル事モ無シ」ト答フレバ、「然ハ異人ノ承ハリタルカ」ト尋ネ持行クニ、惣テ、「承ハリタリ」ト云フ人無シ。然レバ行事ノ判官代、曾丹ガ居タル後ニ寄テ、「此ハ何ニ、召モ無ニハ参テ居タルゾ」ト問ヘバ、曾丹ガ云ク、「歌読共可参キ由被催ル、ト承ハレバ、参タルゾカシ。何デカ不参ザルベキ。此ノ参タ主達ニ可劣キ身カハ」ト。判官代此レヲ聞テ、「此奴ハ早ウ、召モ無キニ、押テ参タル也ケリ」ト心得テ、「何ニ召モ無キニハ参リタルゾ。速ニ罷リ出ヨ」ト追立ルニ、尚不立シテ居リ。

其ノ時ニ、法建院ノ大臣、閑院ノ大将ナド、此ノ事ヲ聞給テ、「シヤ衣ノ頸ヲ取テ引立ヨ」ト行ヒ給ヘバ、若ク勇タル下臈殿上人共数曾丹ガ後ニ寄テ、幕ノ下ヨリ手ヲ指入テ、曾丹ムガ狩衣ノ頸ヲ取テ、仰様ニ引倒シテ、幕ノ外ニ引出シタルヲ、一足ヅ、殿上人共踏ケレバ、七八度許被踏ニケリ。其ノ時ニ曾タムガ起走テ、身ノ成様モ不知逃テ走ケレバ、殿上人ノ若キ随臣共小舎人童共、曾タムガ走ル後ニ立テ、追次キテ手ヲ叩テ咲フ。放馬ナドノ様ニ追ヒ喰ル事、糸愕タタシ。然レバ、此ヲ見ルニ、多ノ人、老タル若キトモ無ク、咲ヒ合タル事無限シ。

其ノ時ニ曾タム、片丘ノ有走り登立テ、見返テ、追次キテ咲フ者共ニ向フ。音ヲ高く挙テ云ク、「汝等ハ何事ヲ咲フゾ。我ハ恥モ無キ身ゾ。云ハム、聞ケヨ。太上天皇子日ニ出サセ給フ、歌読共ノ召、ト聞テ、好忠ガ参テ座ニ候フ、搔栗ヲホト、食フ。次ニ被追立ル。次ニ被蹴ル。何ノ恥ナル」ト云フヲ聞テ、上中下ノ人々咲フ音、糸愕タ、シ。其後曾タム逃テ去ニケリ。其此ハ人皆此ノ事ヲ語テナム咲ヒケル。

然レバ可姓ノ者ハ尚ヲ弊キ也。好忠和歌ハ読ケレドモ、心ノ不覚ニテ、歌読共召ト聞テ、召モ無キニ参テ、此ル恥ヲ見シ、万ノ人ニ被咲レテ、末ノ代マデ物語ニ成ル也ナム語り伝ヘタルトヤ。』

(講談社学術文庫「今昔物語集」本朝世俗篇下 p 165～)(小学館「日本古典文学全集今昔物語」p?)

#### ※「古事談」(元典は「小野宮右府記」)

『円融院の子日の御幸は、寛和元年二月十三日の事なり。……。次に和歌の人を御前に召す。兼盛朝臣・時文朝臣・元輔真人・重之朝臣・曾禰好忠・中原重節等なり。公卿達指したる召し無しと称ひて、好忠・重節等を追ひ立つ。時通云はく、「好忠は已に召人の内に在り」と云々。……』(行幸の様子は前二者との重複が多いので、省略しました。)

⇒大鏡と今昔物語集を合せ読むと、次のような事情が分ります。

円融上皇が子の日の遊びのために船岡（紫野の西）にお出ましになられました。幕を張り巡らした中に同行の貴族たちの席が設けられ、召された5人の歌人たちの座もありました。一同がすっかり着席してしばらくすると、この歌人たちの末席に一人の老人が着座しました。

それが曾祢好忠でした。一座の人々はおかしなことと騒ぎになり、招かれもしないのに勝手に来たことが分り、幕の外に引きずり出されてしまいます。曾丹（曾祢好忠は丹後の掾であったことからこう呼ばれていた）は飛び起きて、なりふり構わず逃げ出したので、皆は手をたたいて大笑いしました。曾丹は和歌はたしかに上手でしたが、思慮が足りず、歌人どもを召すと聞いて、お召しもないのに勝手に参上し、こんな恥をかいたのでした。そして大勢の人の笑いものになって、末代までの語り草になってしまったのです。

⇒「大鏡」という書名は、「歴史を明らかに映し出す優れた鏡」の意味である。文徳天皇が即位した嘉祥3年（850年）から後一条天皇の万寿2年（1025年）に至るまで14代176年間の宮廷の歴史を、藤原北家、ことに道長の栄華を軸にして、大宅世継（190歳）と夏山繁樹（180歳）という長命な二人の老人が雲林院の菩提講で語り合い、それを若侍が批評するという対話形式で書かれています。

⇒上の「栄花物語」のところで触れているように、村上天皇の第五皇子を守平親王といいました。村上天皇と中宮・安子（藤原氏）との間に生まれた皇子には、憲平親王と為平親王という二人の兄がいました。村上帝の崩御に伴い憲平親王が就位して冷泉天皇となりました。

冷泉天皇の即位後に、次期皇太弟をめぐる藤原氏と源高明が対立し、源高明が失脚してしまいます。このため、藤原氏の主張が通って、源高明の娘を妃としていた為平親王がはじかれ、守平親王が皇嗣となりました。そして、冷泉天皇譲位後に円融天皇として即位しました。

在位中は藤原兼家と兼通の間の権力争い、それと絡む皇位の継承問題に煩悶させられましたが、やがて兼家に譲歩し、息子の懐仁親王の立太子と引き換えに、冷泉天皇の皇子・師貞親王に譲位（花山天皇）し、太上天皇となりました。

その後は比較的自由な上皇の身で、詩歌管絃の遊樂や石清水八幡宮・石山寺・南都（奈良）の諸寺への御幸を行っています。寛和元年（985年）2月13日、紫野において盛大な「子の日の御遊」を催し、平兼盛・大中臣能宣・清原元輔・源重之・紀時文らを含む当代の著名歌人に和歌を奉らせた。「大鏡」「今昔物語集」にある、曾禰好忠が召されもしないのにみすぼらしい狩衣姿で推参して追い出されたという有名は逸話は、この時の話です。